

平手打ちのこころ

「バシッ」と、横面を思いっきり平手打ちした。

秋山さんの頬は真っ赤になった。

閉鎖病棟の看護ステーション、それまでは聞くともなく私たちの会話を耳に挟んでいた周囲の看護師も、息を吞んで事態を見守る気配に変わった。

病室から「自分の部屋」へ

秋山さんは約二十年の入院に終止符を打ち、一人暮らしを実現させた人だ。

そのきっかけは両親の死亡に伴う、退院先の消滅だった。自宅が姉妹によって処分されたのである。

それまでは、彼はいずれ自宅に帰るつもりだったようだ。

まだ四十代前半、十分頑張れるはずだ。そんな話を繰り返し、病棟での料理教室に参加

してご飯炊きを覚えたり、病院と契約している町工場にも一緒に見学に行ったり、新たな暮らしの準備を一年半もかけて、共に歩んできた。

「ほんとに退院できるのかな」「洗濯機と冷蔵庫を買うにはお金が足りないよ」「姉貴が家を処分してなけりゃ帰れたのに」などなど、退院が近づくに連れて高まる不安に何度も耳を傾け、現実的な心配は一緒に行動することで、一つずつ安心感に変えた。

秋山さんがアパートを借りて退院したのは、真夏の暑い時期だった。

家財道具を買いに同行し、職員から寄付された中古の家具を一緒に部屋まで運び込んだ時は汗だくだった。

その後、毎月一回訪問した。四畳半一間と台所、部屋の真ん中にあるテレビの上には、昨年末に病棟で催した餅つきの写真が飾られていた。

一緒にお雑煮を作っている時の風景。目の前の秋山さんは、写真と比べると日焼けして引き締まった印象になっている。

そんな写真を前に病院での思い出話をすることもあったが、「退院してよかったよー」と

言う時の彼の笑顔は、何よりも私をうれしい思いにさせてくれた。

病院は「暮らす」場ではない。自分一人の空間を持ち、自由な時間を手に入れ、のびのびした生活を実現した喜びの声、それを聞くのは、共に歩んだ一年半を癒されるような思ひだった。

隣人のいる暮らし、そして再入院

この暮らしに波風を立てたのは、皮肉にも自由な空間を彼が満喫したことによる。毎朝両親の位牌にあげる読経の声が大き過ぎたのだ。

隣人からの苦情が絶えなくなり、しかし信念を曲げない秋山さんは、ある日、家主と口論になる。その場はどうやら収まったようだが、その頃から秋山さんの言うことに不平不満が急激に多くなつた。

「隣の女がいつも大声を出すのに家主は注意しない」「上の階に住んでいる一人暮らしの男は夜中に騒ぐ」「家主が箒で庭を掃く時、俺のところにごみを置いていく」

私には事の真偽を確かめる方法がなかった。

しかし、状況全体から考えて、そして診察や訪問時の秋山さんの様子から推して、被害妄想的な発想が悪化しているように感じられた。

秋山さんは家主との口論を繰り返し、ついにアパートを出て行ってくれと言われてしまった。

行き場所を失ってどうしたらよいのか。

考えて夜も眠れなくなった秋山さんは、すっかり意気消沈し、保証人である姉に付き添われて来院した朝、そのまま自らの希望で再入院した。

入院しなくてもやり過ぎる程度の症状だったと思う。しかし、自宅を持たない秋山さんにとって、アパートを追い出されることは根無し草になることだ。

こうして病院に吸い込まれていく患者さんは稀ではない。

秋山さんの脇に立つ姉の申し訳なさそうな顔に、私は「お姉さんのところにも行かれないんですね？」と念を押した。

再入院した秋山さんは、さっぱり元気がなくなっていた。今思えば、一人暮らしの疲れもあったのかもしれない。

現在と違って当時はヘルパーの制度もなく、週に五日は市内の作業所に通い、週末に家事全般をやりこなすことは、二十年の入院を経てはじめて一人で暮らす秋山さんには大変だっただろう。

しばらくはそつとしておこう、私はそう思った。

と言うよりも、他の仕事がたくさんあったから、肩を落とし黙って病棟にいる一患者さん^ぐにかける時間を私は持たなかった。

『患者』という免罪符

その日は、何人かの患者さんから相談の希望があり、私は午後一杯を病棟で過ごした。看護ステーションで相談を受け、話が終わるとカルテに経過を書いていく。その作業はガラスドア越しに、廊下の患者さんたちからよく見えている。

相談の用件はないが、一言話そうと、ドアの前でしゃがみ込む人もいる。ステーションから出て行く時、そんな彼らと他愛のない会話をするのも私は結構好きだ。

秋山さんが不意に私の方へ寄ってきた。久しぶりのことだ。

笑顔で応えようとしたその瞬間、秋山さんの手が私の胸に伸びた。

「ハッ」とした。

引きつった私の顔に、

「広川さん、俺、こんなことになっちゃたんだよ。少しくらいイイ思いついていいだろう」

と、哀れっぽい目を向けている。

私は咄嗟に秋山さんの胸ぐらを掴むと、そのまま看護ステーションにとって返した。血相を変えている私に、いくぶん警戒した表情で看護師長が寄ってきた。

事の顛末を告げると、彼女はゆっくりと言った。

「秋山さん、あなたは、してはいけないことをしたのよ。広川さんは、とっても傷ついたの」

そうだ、私は傷ついたんだ、と自分の中でも少し納得してところが落ち着いた。

しかし、その後の秋山さんの言葉がまずかった。

「だって俺、もう駄目なんだよ。どうせずっとここにいるんだからさー」

——だから何だつて言うの？　ここに居るなら何をしてもいいつて言うの？　第一、ずっと病院に居るつて誰が決めたの？

看護師長を相手に延々とご託を並べている秋山さんに、私が一撃を喰らわせたのはその時だった。

本気でその人と向き合う

「何で殴られるかわかるよね。病院にいれば何をしてもいいと思つたら大間違い！　世の中では痴漢行為は犯罪だし、殴られるくらいじゃ、済まないよ」

「秋山さん、今回は病院に戻ってきたけど、またの機会があるでしょう。どうしてずっと病院に居るつて決めつけるの？」

「あなたとの信頼関係はこれまでだわ。今日で担当PSWは辞めさせてもらいます。相談室に帰つて誰かに秋山さんを引き継いでくれるようお願いしておきます。決まつたらそのPSWが挨拶に来ます」

私以外、二人しかいないPSWのうち、どっちに頼めるかなと思案しながら私は一気に

言い放った。

——たぶん今日の看護師の申し送りはこの話題で盛り上がるだろうな。いや、それよりも患者さんを殴っちゃ、まずかっただろうか……。院長から怒られるかもしれない。けど私は黙って耐える立場ではなかったはずだ。秋山さんと私のこれまでの信頼関係に、先にひびを入れたのは向こうだもの……。でも患者さんだからなあ。

そんなことを頭の片方で思いながら、秋山さんをじっと見た。
頬に手を当ててうつむいている。

ステーションの中は、いつもなら帰宅時間の近づいた看護師のおしゃべりや、タバコだの葉だのを取りに来る患者さんの出入りでざわつくはずが、しんと静まりかえっている。みんなが息を潜めている。

そんな時間が、私と秋山さんを遠巻きに包んでいた。

「……すみませんでした」

頬に手を当てたまま、ぼそりと秋山さんが言った。

私は、黙って病棟を出た。

正直言って、胸を触られたのは何も秋山さんがはじめてではない。

たぶん、たいいていの女性職員が、いや男性職員だって一度ならず経験することだろう。もちろん、スキンシップとか、慰めとか悪戯とかいう言葉で許される行為ではない。

しかし、私が本気で怒った挙句、殴るまでしたのはこの時だけだ。際どい行為かもしれないが、この時の私は、本気で秋山さんと向き合ったつもりだ。

腹が立ち、傷ついたのも事実だろうけど、それよりも、ここで『患者扱い』して許したら、それこそ、この人は一生「患者」のままだと、そんな信念めいたものがあつた。とは言えやはり、賛否のあるところではあるだろう。

秋山さんには、ほどなく、私よりも若い女性P S Wが相談役として挨拶に行った。

しばらくは何の相談もなかったようだが、再び意欲を取り戻した結果、ちゃんと一人暮らしのアパートを別のところに借り直し、元気に退院していった。

ほらごらん、退院したじゃない。私はそう言ってやりたかったが、黙っていた。

その後も、彼は入退院を繰り返している。その都度、アパートも引き払う。それでも、彼はまた、戻っていくのだ。

そう、「患者」ではなく「病気を抱える一市民」としての暮らしへ――。